

ヘルン文庫の八十五年 — 富山への道、未来への道 —

二〇〇八年に、ヘルン文庫八十五周年を記念して作成した動画のシナリオ案です。脚注の【一】内は、該当する段落の映像例として高成玲子先生が考えていたものです。これを元に録音・編集した映像は、旧制富山高等学校同窓会をはじめ、各種イベント等で披露され好評でした。

一八九〇年（明治二十三）四月カナダ太平洋汽船のアヴィシニア号で横浜に入港したハーンは、何もかもが言いようもなく愉快で目新しい日本の街を、何処へでも行けと必死で身振り手まねしながら人力車で駆け巡りました。ラフカディオ・ハーン、四十歳。憧れの日本にとうとうやってきたのでした。

それから十四年後の一九〇四年（明治三十七）、西大久保の自宅で心臓発作で亡くなるまで、島根県松江市の尋常中学校、熊本市の第五高等学校、途中で居留地の外国人向け英字新聞『神戸クロニクル』社時代を挟んで、帝国大学文科大学（今の東京大学）で英語教師として日本の若者たちを教

【横浜の町並み、人力車、ハーンの後姿……】

【島根県尋常中学校、熊本第五高等学校、ガス灯灯る神戸の街、東京帝国大学、西大久保の小泉邸……】

えながら、それと同時に、彼は英米の読者たちに向かって日本という国を語り続けたのでした。

雑誌『大西洋評論』等を通じて発表された彼のエッセイはやがて十四冊の本として世に出ることになりました。『知られざる日本の面影』

"Glimpses of Unfamiliar Japan"から最後の『怪談』"Kwaidan,"と『日本——一つの解明』"An Attempt at Interpretation"まで、彼が心血を注いで次々に書きあらわしたそれらの本は、東洋の神秘的な新興国日本を解き明かしただけでなく、日本人自身に対してもそれまで気がつかなかった日本を教えるものでありました。

また、帝国大学での彼の講義は、ハーンが亡くなって後、学生の筆記ノートをもとに『文学の解釈』"Interpretations of Literature,"『詩の鑑賞』"Appreciations of Poetry"等などとして次々に刊行されたのです。

それらの筆記ノートを提供した教え子の一人が田部隆次でした。隆次はハーンが東京大学に招聘されたのと同じ明治二十九年に東京大学に入学し、ハーンの弟子となりました。すでに日本に帰化して日本人小泉八雲となっていたハーンは、エッセイの課題で最優秀となった隆次に賞品として『ラ

【ハーンの著作十四冊、縮編本…】

【ハーンの著作…】

【ハーンの講義メモ、帝国大学時代の田部隆次、口述筆記ノート外観と内部】

スキン全集』を送るなどして可愛がりました。先年、発見された内田百合子氏による口述筆記ノート「田部隆次半生記」には、師、小泉先生とのことが温かく書かれています。

一九〇七年（明治四十）、隆次は第四高等学校から女子学習院教授へ転任し、西大久保に引っ越しました。小泉八雲の最初の評伝を執筆することになったのが隆次であったことや、たまたま小泉家の近くに住むようになったこともあって、次第に隆次は小泉家のセツさんから何かと相談を受けるようになっていったのです。このころ学習院教授であった兄の南日恒太郎も西大久保に住んでいました。後年、ヘルン文庫を富山へ招来することになった大きな役割を果たすことになる兄弟が、ハーンの遺産に吸い寄せられるようにこの地に集まってきていることに、不思議な運命が働いているように見えます。

一九二〇年（大正九年）南日は職を辞して故郷富山へ帰りました。しかし故郷は彼を休ませてはくれませんでした。一九二三年（大正十二）五月東岩瀬の豪商馬場家のはる未亡人から皇太子殿下（昭和天皇）のご婚儀

【田部隆次著『小泉八雲』、小泉家内部ハーンの書斎、セツさんと遺児たち、西大久保近辺（もしあれば）、南日恒太郎、田部隆次】

を記念して高等学校を設立するために富山県に百万円の寄付の申し出があったのです。県は米田元吉郎所有の大広田村蓮町に敷地を定め準備を進めました。【馬場はる、大広田村蓮町その他（犬島氏所蔵の写真を活用）】

そんな時、関東大震災が起こりました。

南日恒太郎は新・高等学校校長事務取扱として文部省との折衝にたびたび上京しました。そんな折、弟の田部隆次から「震災後、ハーンの蔵書が再び惨禍に見舞われることを心配したハーンの未亡人セツさんからその譲渡先を探すように頼まれていたが、このほどようやく南日家の末弟田部重治が勤める法政大学に一万円で譲渡することになった」という話を聞いたのです。それからの南日の活躍は鬼気迫るものがありました。「ハーンの蔵書を是非富山に譲ってほしい。それを持つことで僻地とされている富山に『いい先生に来てもらえる』だろうし、これを機縁に富山を『文化の中心地』にしたい」という南日の願いは馬場はるさんを動かし、すでに九分九厘決まっていた法政大学行きの話がご破算になったのです。

それだけではありません。南日の動きは迅速でした。『日本——一つの解

【関東大震災】

【小泉セツ、馬場はる、南日恒太郎、田部隆次、田部重治】

明』の手書き原稿を含めて一三五二点の英文書籍、七一九点のフランス語書籍、三六四点の日本語書籍、計二四三〇冊の書籍はそれから一週間後には、富山県庁に送られていたのです。

譲渡の金額一万五千円は馬場はるさんから南日の手を通じて直ちに小泉家へ届けられました。大切な本を一冊一冊丁寧に包んで十四の木箱にいれ、上野駅から貨車で運び出したのは富山市月岡出身の中土義敬の創建した北星堂でした。梱包には幾日も幾晩もかかったといえます。生前、何の關係もなかった富山にハーンの蔵書が送られるということを知ったゆかりの人々から大きな反対が起きることが予想されました。そんなときマスコミ關係に緘口令を敷いたのは正力松太郎でした。富山の關係者が力を併せて、ハーンの蔵書を富山へ持つてくるために、奔走したのです。

ちようどそれは、富山に七年制の高等学校を作ることを馬場家が申し出たとき、米田元吉郎が学校用地を提供し、犬島宗左衛門が寄宿舎を作るなど、多くの岩瀬の人々がこぞって協力したことに似ています。

こうして旧制富山高等学校は一九二三年（大正十二年）七年制のユニークな県立高等学校として開学、ハーンの蔵書は「ヘルン文庫」としてその象徴的存在となったのです。その後も馬場家はことあるたびに経済的に富

【手書き原稿、二四三〇冊の書籍のうち何冊か、南日自筆の蔵書目録…】

【千田篤氏所蔵の写真から借用】

【犬島氏所蔵の写真から借用】

【富山高校全景、八雲図書館…】

山高等学校を支え続けました。

七年制高等学校設立は、はるさんだけではなく、舅八代馬場道久氏、亡夫九代道久氏の遺志でもあったということです。が、それにしても百万円、最終的には百五十万円にも上った巨額の金を投じて、どうしてそのような大事業を行うことを考えたのでしょうか。

話は大正十二年からさかのぼること約半世紀、明治十年十一月のことです。北海道厚岸でニシン、昆布などを積んで船出した馬場家の持ち船『通久丸』が襟裳岬東方で大暴風雨に出会い、金華山沖で東方に向かう暖流に乗り上げ、六ヶ月以上のあいだ太平洋上を漂流した後、イギリス船エゼルスタン号に発見・救助されるという事件が起きました。乗員二十三名中、生存者は四名。船主馬場吉次郎（後の八代道久）の弟、船頭馬場用助もこのとき海の藻屑と消えたのでした。これこそが馬場家にとっての黒船体験だったのです。

生存者から無邪気なまでの驚きをこめて伝えられた海の彼方の新興都市への複雑な思いは、相次いで二人の息子を失うことになった悔しさとともに終生当主であった馬場久兵衛の脳裏を去ることがなかったのでしょう。それから三十二年後、『高岡新報』に再び取り上げられることによって、九代道久、

【馬場家、馬場家向かいの公園のバイ船、バイ船の絵…】

【海図、通久丸の絵、事件を伝えるサンフランシスコの新聞、石川新聞…】

その嫁はるは先代の思いの深さを改めて知ることになったのです。バイ船は物資だけでなく時代の最先端に行く情報も運びました。新しい時代を乗り切っていく若者たちに高等教育機関への進学の道を開き、最先端の情報を駆使しうる時代のリーダーを育成していくこと、それこそが富山高等学校にかけられた夢であり、それを受けて南日恒太郎は「ハーンの蔵書を機縁に富山を文化の中心地にしたい」と願ったのではないのでしょうか。」

馬場はるの篤志と南日恒太郎の熱意によって富山高等学校が作られ、ハーンの蔵書が富山にもたらされてから八十五年の歳月が流れようとしています。ここにいたるまでたくさんの方がありました。第二次世界大戦末期には蔵書を空襲から守ろうと、多くの人が加わってB29が飛び交う下を荷車で黒部の森丘家まで運んだとのこと。有名無名の限らない人々の思いがへるん文庫を守ってきたのです。

今へるん文庫は新制富山大学の象徴として富山市五福にある富山大学図書館五階に大切に保存され、世界中から多くの研究者を集めています。少しでも多くの学生や県民に知ってもらうために、第二、第三、第四水曜日には一般開放もされるようになりました。また、北星堂書店の中土家から中土文庫が新たに寄贈されたり、田部隆次半世紀の口述筆記ノートが発見

【高岡新報、富山高校、旧制富山高校のへるん文庫、へるんの書籍……】

【立山を背景に岩瀬の風景、富山の空襲、勤労奉仕する学生たち（富山高校二十年史から）】

【現在の富山大学、附属図書館、へるん文庫入り口、へるん文庫内風景、中土文庫、田部隆次ノート……】

されるなど、へるん文庫関係文庫もさらに充実の度を深めています。

これを機にハーンの実像をもっと身近に知ってもらえるようになれば、ハーン自身のイメージだけでなく、私たちのふるさと富山ももっと違った風に見えてくることでしょう。ハーンが百年前に発見し、訴え続けたことは今も決して古びていません。地球規模で新しい価値観が求められているまこそ、ハーンを見直すときと言えるでしょう。そんな今、へるん文庫は地域に向かって閉ざされた扉を大きく開き、私たちとともに歩き始めました。へるん文庫の新しい時代が始まろうとしているのです。

【へるん文庫、ハーンの写真、ハーンの著作（開いた状態）、大学の全体像、立山連峰…】



へるん文庫の85年 富山への道 未来への道



へるん文庫



映像作品より